

リーグ戦の思い出

戦後、昭和20年代の空手界は他の武道と同様に大変厳しい状況におかれていたと思います。町道場はなく、戦前と同様に大学空手部が中心で武道としての空手修行であり、基本、形、約束組手、自由組手、手足の武器としての徹底的な鍛錬の繰返しであり、他大学との交流は、同流派、他流派にかかわらず交換稽古というかたちで行われたが、稽古中に怪我人も多く問題になることがあった。

当時は春秋年2回行われた松濤館流派内の昇段審査会は船越義珍先生出席のもと戦前からの伝統校である慶応大学・早稲田大学等の武道場が審査会場になり開催され、各大学の受験者が大勢集まった。審査される先生は船越先生を中心に各大学の古い先輩方であり、受験者の組手の相手をされるのは若い先輩方であった。したがって各伝統校の先輩方の交流も密であったと思われます。

昭和28、29年頃から拓殖大学OBの中山正敏氏を中心に交換稽古の問題点解決のため試合方式の研究会が盛んに行われ、昭和29年秋に日本大学農獣医学部(中山正敏氏)、駒澤大学(西山英峻氏)、千葉工業大学(箕田常次郎氏)の3大学の指導者が拓殖大学卒業のOBの先生方であったので、研究中の試合方式による日本で初めての試合が実現した。試合場は円形であり相撲の土俵のような形状であった。この試合が以後毎年行われた大学定期戦の第一回大会であります。優勝校は決めず数名の出場選手が表彰された。試合は自由組手で形は各校の代表選手が演武した。後日郵送されるはずの表彰状は送付されなかったようです。昭和30年6月19日、日本空手協会が借用した道場、東京都新宿区四谷のムービーセンター内の映画試写室で第2回定期戦が行われ試合場は四角形となり主審、副審で試合が行なわれた。第一回と同じく優勝校は決めず数名が表彰された。

以後定期戦は春秋2回行われ、参加大学も年々増え今日に至っているが、これは試合制度の道を開かれた中山正敏先生を始めとする各大学の古い先輩方の御努力と(社)日本空手協会の諸先生、参加大学の諸先輩の空手に対する情熱が実を結んできたものと厚く御礼申し上げます。

私も日本で最初の試合化の大会に出場できた選手の一人として、これは最大の名誉であり喜びであります。

本大会の益々の御発展を心からお祈りいたします。

千葉工業大学空手道部初代主将 高浦英児
平成21年4月吉日